

概要

目的：

群馬県教育委員会がスコットランドと実施している非認知能力の評価・育成事業における共同研究において、県内学校で実践した取組を報告するとともに、学校運営や指導法、校内研修や教員育成について具体的な方策を協議する。

参加者（計8名）：

群馬県総合教育センター所長及び長期研修員、総務課学びのイノベーション戦略室長及び指導主事2名、高校教育課指導主事、群馬県立伊勢崎高等学校（SAH指定校）教員2名

日程：令和7年6月8日～6月15日

訪問先：

[小学校]	ローズバンク小学校、テイビュー小学校
[中等教育学校]	クレイギー高校
[大学]	ダンディー大学
[政府機関]	スコットランド教育庁

訪問先での活動内容及び成果

ローズバンク小学校（共同研究校）

◆ 活動内容

- ① 授業参観及び施設見学
（6年生の児童5名による日本をテーマにしたプレゼンを参観、質疑応答）
- ② 日本における小学校の1日の紹介（伊勢崎市立赤堀東小学校）
- ③ 昨年度の訪問により取り入れた教育実践の報告（群馬県立伊勢崎高等学校）
- ④ 教職員（管理職含む）との意見交換、協議
- ⑤ 児童議会メンバーへのインタビュー



長期研修員による赤堀東小の紹介

肖像権の都合により写真は非表示

児童議会メンバーへのインタビュー

令和7年6月スコットランド渡航報告

ローズバンク小学校（共同研究校）

◆ 成果

① 群馬県の教育との比較

- 両地域の教育現場に**共通する課題（教員の多忙など）**や相違点（グループ学習の頻度など）を理解することができた。
- 日本の規律ある学校生活や取組**に関心があり、実践に向けて前向きに考えていく様子であった。

② リーダーシップの育成

- 児童議会やリーダーシップグループが組織**され、児童が学校運営や課題解決に積極的に関わっている。特にリーダーシップグループはP 1（年長）からP 7（小6）までの縦割りで構成され、毎週テーマを決めて話し合い、課題解決に取り組む。

③ ウェルビーイングの指標と振り返りの文化

- 目標の共有**及び自己の**振り返りの文化**が根付いている。

ウェルビーイングに必要な8つの指標「**SHANARRI**」を教室掲示

Safe、Health、Achieving、Nurtured、Active、Respected、Responsible、Included
(安全) (健康) (達成) (育成) (活動的) (尊敬) (責任) (包含)

肖像権の都合により写真は非表示

日本をテーマにした児童のプレゼン

クレイギー高校（共同研究校）

◆ 活動内容

- ① 授業参観（英語・数学・**ドラマ**）
- ② 日本における高等学校の授業（国語）の紹介（群馬県立伊勢崎高等学校）
- ③ 昨年度の訪問により取り入れた教育実践の報告（群馬県立伊勢崎高等学校）
- ④ 教職員（管理職含む）との意見交換、協議
- ⑤ 同一地域の学校との**統合による新設校（グリーンフィールドアカデミー）の説明**

肖像権の都合により写真は非表示

授業参観（ドラマ）

著作権の都合により写真は非表示

新設校（グリーンフィールドアカデミー）のイメージ

クレイギー高校（共同研究校）

◆ 成果

① 授業における非認知能力（創造性）の育成の取組

- 英語の授業では物語の続きを創作したり、ドラマの授業においては台本にオリジナルストーリーを追加するなど、**生徒が創造力を働かして主体的に表現活動に取り組む**様子が見られた。
- 伊勢崎高校の「**Agency Day**」の説明を受けて、**自由度の高い探究活動**に関心を示していた。

② 生徒理解と指導力向上への取組

- 教員は**生徒の進度をモニタリング**し、情報共有することで、個々の生徒に合わせた指導を行う。また、教員同士のレビューミーティングでは、**1年間の反省と改善策を話し合い**次年度に生かす。

③ 不登校傾向の生徒への対応

- 「全ての子どもに学ぶチャンスがある」**という理念に基づき、最大限のコミットメントを行い、多様なアプローチを行っている。「パートタイムタイムテーブル」等。

④ 新設の「グリーンフィールド アカデミー」への移行

- 2校が統合し1,800名在籍可能な新設校が秋に開校。**地域のハブ**として期待。
- 新設校の**教育目標は12のメタスキル**を設定。国の目標（C f E）ともリンク。

ダンディー大学

◆ 活動内容

- ① 群馬県の教育の現状と非認知能力育成の取組を説明
- ② 群馬県立伊勢崎高等学校の実践報告
- ③ 教員養成プログラム担当職員との意見交換
- ④ 大学事務局との共同研究の今後の見通しについて協議



伊勢崎高校教員による実践報告

肖像権の都合により写真は非表示

ダンディー大学職員との意見交換

ダンディー大学

◆ 成果

① 群馬県の実践の説明と課題の共有

- スコットランドが国レベルで教育方針を決定し、学校がそれに従う教育システムであるのに対し、**群馬県は自治体として先進的な実践を進めていることを評価**された。
- 非認知能力育成の実践は予想以上に広がっているが、**児童生徒の非認知能力を育てる教員の育成が課題であることが共通の認識**となった。

② 伊勢崎高校「Agency Day」の評価

- 生徒に主体的な活動の機会を提供する画期的な実践**であるという評価を受けた一方で、**厳格なカリキュラムの中でこれを設定する難しさ**や、活動後の**振り返りが十分でない**点、また**担当教員により支援にばらつき**があるといった課題が確認。目的を明確に伝えていくとよいと助言を受けた。

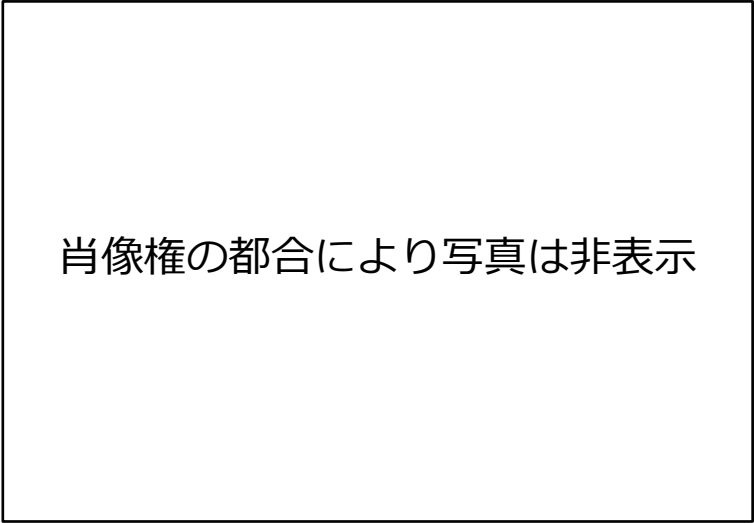
③ 大学の教員養成からの視点

- 非認知能力育成を主眼とした教員養成**では、専門知識だけでなく**教員の経験の共有が重要**。多様な生徒への対応には単一の指導では不十分であることが示唆された。
- 教員養成課程の学生**は、教育実習中に生徒一人ひとりの特性や必要なサポートをまとめたファイルを作成し、それを大学で共有することで**生徒を見取るスキルと教員としての自信を養っている**。

テイビュー小学校（研究助言者推薦校）

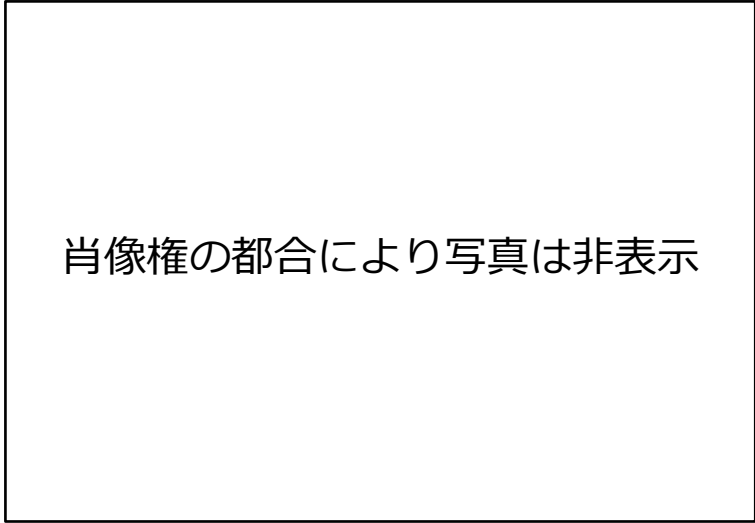
◆ 活動内容

- ① ダンディー市「指導法支援チーム」との情報交換
- ② 国と自治体、学校現場をつなぐ取組の説明
- ③ 政策形成への子どもの声の活用の在り方を紹介



肖像権の都合により写真は非表示

「指導法支援チーム」の職員



肖像権の都合により写真は非表示

協議・情報交換の様子

テイビュー小学校（研究助言者推薦校）

◆ 成果

① 「指導法支援チーム」の役割の把握

- 生徒が自立、リーダーシップ、クリティカルシンキング、レジリエンス、協力という5つのスキルを身に付けるために、教員を支援。特に、教員向けの研修、教育相談対応の助言、カリキュラム計画を支援している。また、OECDのレビューを受け、カリキュラムの明確化と改善を進めるため、年1回、進捗状況を報告するとともに、教育現場の声を政策に反映させる活動をしている。

② 子どもの声の傾聴と教育への反映

- 子どもの声が教育政策の軸と考え、生徒3、4人が政府代表と直接話し、学校の課題や生徒の要望を伝えることができる。政策として議論される際も、生徒の意見を聞き、合意が得られない場合は再議論するプロセスが確立している。また、「ボイスグループ」という活動により子どもたちが声を上げやすい取組が行われ、生徒の意見を反映した民主的な学校運営の実例を知った。

③ ソーシャルスキルの評価

- 数値化しにくいソーシャルスキルを、学校ではパーソナルアチーブメントとして生徒一人ひとりの進捗をとらえ、具体的な姿を評価している。中等教育では、生徒自身が「プロフィール（履歴書）」を作成し、ダンディー市の共通データベースを通じて、進路に活用されている。

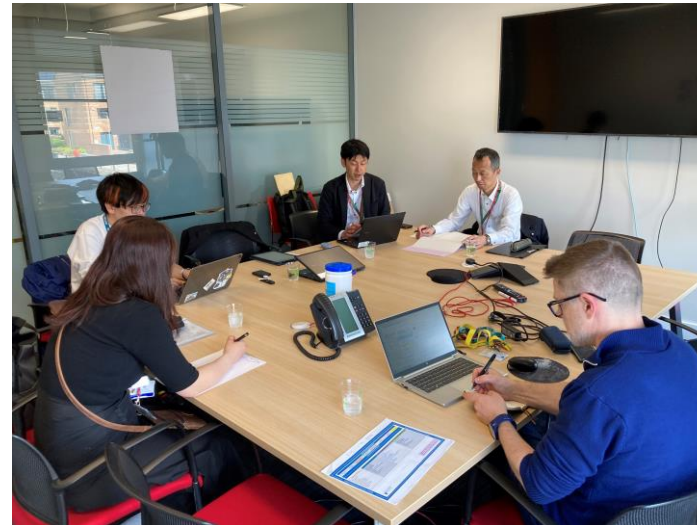
スコットランド教育庁

◆ 活動内容

- ① 共同研究の進捗報告、今後について意見交換
- ② スコットランドの教育課題について情報提供
- ③ 教育改革の方向性、教育格差解消、国と自治体の関係性について意見交換



スコットランド政府施設「Victoria Quay」



スコットランド教育庁担当職員との協議

スコットランド教育庁

◆ 成果

① 群馬県の実践への評価

- 伊勢崎高校の「Agency Day」「Donut会議」の取組が、**生徒の主体性を伸ばすだけでなく、教員の目線合わせを同時に実現する好事例として高く評価**された。
- 「Agency Day」は、生徒が自ら学ぶ機会をもつことの重要性を、保護者も理解し協力が得られている点がよい取組であると指摘された。

② ソーシャルスキル育成に向けた教員同士の対話の重要性

- 教員同士の対話の不足は両地域の課題**であった。スコットランドでは、週1時間のカリキュラムデザインの時間を設ける取組を実施しているが、共通の時間を確保する課題が存在している。
- 学力だけでなくソーシャルスキル育成に向けた取組の充実には、教員同士のコミュニケーションが不可欠であり、教員に十分な時間を提供することが必要**である。

③ 政策を教育現場に浸透させる取組

- 自治体ごとに異なるが、ダンディー市の「指導法支援チーム」のように、**政策を現場と一緒に具現化する取組**が行われたり、地域や学校の文化が異なっても、**共通の目的や強み（例：島による海洋関係プロジェクト）による連携**を行うなど様々な可能性を探り政策を教育現場に伝えている。

参加者の振り返り及び今後の展望

参加者の振り返り及び今後の展望（ 群馬県総合教育センター所長）

<振り返り>

- ・スコットランドは**移民が多い国であり、多様性を認め、インクルーシブな教育をせざるを得ないという動機付けが、日本人には考えられないほど強い**ものだと感じた。そうした歴史的、文化的な背景があり、現在の教育につながっていることを知ることができた。
- ・スコットランドは、**教職員定数や設備が日本よりも優れているわけではない**ことが分かった。限られたリソースでいかに上手く多様な児童生徒に対応するかを考え抜いている点がスコットランドの進んでいる部分であると感じた。
- ・**日本ではインクルーシブ教育や非認知能力の育成を「やらなくてはならない」という切迫感がまだ低い**現状があるため、今の日本の教育を比較的よいと感じるのかもしれないが、今後日本でも少子化と多様化が同時に進み、インクルーシブ教育や非認知能力を伸ばす教育への切迫感が増すだろうと考えている。**スコットランドは、日本より10年先を進んでいるようだった。**

<今後の展望>

- ・限られた教員数や設備での教育には限界があるため、**授業や指導の工夫につながる研修や研究の充実と同時に、教職員定数の改善など物理的な条件整備を進めると、車の両輪として考え、取り組んで行く必要がある。**

参加者の振り返り及び今後の展望（ 群馬県総合教育センター長期研修員）

<振り返り>

- ・スコットランドの教育目標である「**カリキュラム・フォー・エクセレンス**」は子どもたちが**目指す姿を明確に示している点で魅力的**であると感じた。
- ・幼児期から義務教育、高等学校においても**学年を超えた縦割りによる活動**を行っており、それを通じて子どもたちの成長を促す文化があるのだろうと感じた。
- ・ローズバンク小学校での**インクルーシブ教育（誰一人取り残されない教育）**が印象的だった。
- ・教員同士が「**誰一人取り残されないためにどう動くべきか**」を自然と議論している学校風土を、所属校でも創り出していく必要があると感じた。
- ・日本の教育現場では**教員間の意思疎通が不足**しており、多忙な中で教員が互いに**助け合ったり悩みを共有したりできていない現状**を痛感した。

<今後の展望>

- ・**縦割りの活動**は参考になった。
- ・改めて教育現場の様子をしっかりと把握し、長期研修員として、**児童の非認知能力向上を念頭に、教育活動を行いたい**。

参加者の振り返り及び今後の展望（ 群馬県立伊勢崎高等学校教員）

<振り返り>

- ・スコットランドの非認知能力育成の取組は参考になり取り入れていきたい。特に、**職員同士が学び合い、助け合う体制**が整っており非常に印象に残った。
- ・多様な人種や異なった言語などバックグラウンドの異なる子ども達が多くいる中で、**生徒の個性を育てる授業づくり**をしていると感じた。
- ・ローズバンク小学校の児童議会を運営する中で、ディスカッションを重視し、**リーダーを育成する取組**は強く印象に残った。
- ・クレイギー高校では、**教材を教えるというよりも生徒の主体性を重視した授業**に感銘を得た。
- ・スコットランドでは、日本の教育にはない、あるいは実現が難しそうな文化や教育制度の違いを見た上で、**日本の教育も良い面がたくさんあり、頑張っているのだと再認識**できた。

参加者の振り返り及び今後の展望（ 群馬県立伊勢崎高等学校教員）

＜今後の展望＞

- ・ 学力を高める教育は必要である。しかし、**学歴主義になることなく、生徒の学力を高めていく教育**について考える必要があると感じた。
- ・ 生徒が主体的に学校運営に関わるような、**非認知能力を高める教育を学校全体で取り組むための一歩として職員研修**に活かしていきたい。
- ・ ローズバンク小学校の**リーダー育成を自校でも**行えればと考えている。
- ・ **教員も主体的に職員研修に取り組み、教員間で協力**し生徒の非認知能力を高める教育を実践していきたい。
- ・ **日本で行われている素晴らしい授業にさらに磨き**をかけられるよう、今回の経験をフォローアップや職員研修につなげていきたい。

参加者の振り返り及び今後の展望（群馬県教育委員会事務局総務課）

<振り返り>

- ・スコットランドへの視察等で得た知見を踏まえ、伊勢崎高校が開始した具体的な取組を現地の関係者に報告することで、**共同研究が実践の段階へと移ってきた**ことを実感できた。
- ・**伊勢崎高校の取組**に対して、スコットランドにおいて多くの共感を得るとともに、助言が得られたことで、**さらにより取組への改善が期待できる**と感じた。
- ・現地児童による日本をテーマにしたプレゼンを参観したり、群馬県の教育に関する質問を受けたりするなど、**スコットランドにおける日本や群馬県への関心の高まり**を実感した。
- ・**教員同士の対話の不足は両地域に共通の課題**であることが分かった。
- ・児童生徒への効果的なフィードバックには、**教員同士及び教員と児童生徒とのコミュニケーションの機会確保が不可欠であり、制度的・時間的な工夫が必要**であるとの認識を共有した。
- ・政策決定に子どもの声を含めることや、現場の教員と一緒に政策を具現化する取組は大変参考になった。一方、ある成功例が別の場所で機能するとは限らず、何よりも**子どもや学校、地域の実態に応じて、様々な可能性を探り政策を現場に伝えていく**ことが重要であると感じた。

参加者の振り返り及び今後の展望（群馬県教育委員会総務課）

＜今後の展望＞

- ・ **スコットランドの学校、自治体、政府との良好な関係を継続**しつつ、伊勢崎高校が行う共同研究の具体的な取組に対して、計画、実践、改善における支援、助言を行う。
- ・ スコットランドの新年度である2025年秋－2026年夏の具体的な取組に向けて、**学校間の協働的な取組、教員による実践の共有、生徒のオンラインによる交流を開始**する。また、その進捗を次回の渡航時に報告するとともに、取組の修正、改善に向けて協議を行う。
- ・ スコットランドで多く見られた非認知能力の育成を意識した取組は、日本の教育の中でも行われていることである。一方、**経験的にあるいは感覚的に行っている非認知能力の育成を担っている取組を可視化、言語化することで共通の理解を促す**ことが重要である。
- ・ 共同研究の進捗を確認するとともに、得られた成果や課題を整理し、**非認知能力の育成に向けた「群馬モデル」の一部としてまとめ**ていく。

参加者の振り返り及び今後の展望（群馬県教育委員会事務局高校教育課）

＜振り返り＞

- ・ **「子どもたちの成長を願い、真摯に教育に取り組む教員の姿勢」は、スコットランドも日本も同じ**であると実感した。日本の教育も、基礎的な学力の定着に加え、生徒の主体性を特別活動等を通じて育むなど、多くの優れた点を有していることを再確認する機会となった。
- ・ 高校教員がスコットランドの教育に直接触れ、多様な立場の参加者とともに学び、多くの気づきを得ながら、**自校の教育の良さも再確認**できたことは、大きな意義があった。
- ・ スコットランドでは、小学生であっても「何のために学んでいるのか」を自分の言葉で語ることができていた。これは個々の力の差ではなく、**「学ぶ目的を意識させる」「子どもたちに語らせる」といった教育実践**が日常的に行われているかどうかの違いにある。
- ・ **教員同士が生徒の状況や教育手法について日常的に意見交換**を行い、実践の改善や学びの質の向上につなげようとしている様子がうかがえた。
- ・ **教員の成長を個人の努力に委ねるのではなく、組織として支援する体制**を整えている点が印象的である。他の教員の実践を「見て学ぶ」だけでなく、教員が安心して成長できるサポートが重要である。

参加者の振り返り及び今後の展望（群馬県教育委員会事務局高校教育課）

＜今後の展望＞

- スコットランドで得た知見や、今後の伊勢崎高校での実践をふまえ、**SAHの取組をさらに深化**させるとともに、県全体への浸透を図るため、**学校現場に寄り添った支援を継続**する。
- ・ **伊勢崎高校とスコットランドとの連携が円滑に進む**よう、引き続き学校をサポートする。
- ・ SAH指定校・協力校を中心に、**日々の教育活動や特色ある取組を共有できる機会を創出**することで、**教員自身が自らの実践の価値や良さを再確認できるような場づくり**を進める。
- ・ 教科ならではの「面白さ」（各教科の見方・考え方を働かせるよさ）を生徒が感じ、**生徒にとって学ぶことの楽しさや意義が実感できる授業づくりを推進**する。
- ・ **教職員のビジョンの共有や方向性の統一を図るための校内体制の構築**について、SAH指定校の事例等を他校へ共有する。

まとめ（今後の方向性）

まとめ（今後の方向性）

スコットランドにおける協議や意見交換で得られた知見を活かし、両地域の教育課題改善に向けた連携を一層強化する。

- ・ 非認知能力の評価・育成に関する「群馬モデル」の全県への展開に向けて、両地域の課題を共有し、それぞれがその方策を検討するとともに、定期的に情報共有することで、**共同研究における取組の進展**を図る。
- ・ 群馬県とスコットランドの教員が情報交換を行い、**両地域の学校が協働した探究活動や、オンラインによる生徒同士の交流を通じた授業実践**などを計画・推進する。
- ・ 総合教育センターにおいて、**児童生徒が主体的に考え、行動する場面を設ける授業づくりの研修**を計画する。また、各学校からの非認知能力育成に関する研修支援の要望があれば、現地での体験や知見を共有する。